

無門関

参学の比丘

弥衍 みえん

宗紹の編

一 趙州の狗子 じょうしゅうのいぬこ

趙州和尚、因みに僧問う、「狗子に還 かえ

って仏性有りや」。州云く、「無」。

無門曰く、「参禅は須らく祖師の関すべか

を透るべし。妙悟は心路を窮めて絶せ

んことを要す。祖関透らず心路絶せず

んば、いじやうじやう 尽く是れ依草附木の精霊なら

ん。且らく道え、じゆい 如何が是れ祖師の関。

只だ者の一箇の無字、こ 乃ち宗門の一関すなわ

なり。遂に之れをなす目けて禅宗無門関と

曰う。い 透得過する者は、とうとくか 但だ親しく趙た

州に見えるのみに非ず、まみ 便ち歴代の祖あら すなわ

師と手を把とつて共に行き、眉毛びもつあ厮あい結

んで同一どういつじ耳にに聞く可べし。豈あに慶快けいかいなら

ざらんや。透関を要する底てい有あすること

莫なしや。三百六十の骨節、八万四千

の毫竅うしんきやうを將あつて、通身に箇の疑団を起

こして箇の無の字に参まぜよ。昼夜提撕ていぜい

して、虚無きよむの会えを作なすこと莫なれ、有無うむの

会えを作なすこと莫なれ。箇なの熱鉄丸ねつてつがんを吞どんりよう了

するが如くに相あい似にて、吐はけども又た

吐き出さず。従前の悪知悪覚を蕩尽しとうじん

て、久々に純熟して自然じねんに内外打成一ないげだじょう

片ならば、唾子あしの夢を得るが如く、只

だ自知だすることを許す。驀然まくねんとして打だ

発はつせば、天を驚かし地を動かぜん。関将かん

軍の太刀を奪い得て手に入るるが如く、

仏ぶつに逢あうては仏を殺し、祖そに逢あうては

祖を殺し、生死岸頭しよつじがんとうに於いて大自在を

得え、六道四生ろくどうしじよの中ちゆうに向むかひひつて遊戯三昧ゆげさんまい

ならん。且しばらく作麼生そもさんか提撕ていせいせん。平生へいせい

の氣力を尽こくして箇この無この字こを拳こせよ。

若もし間斷かんだんせずんば、好はなはだ法燭はなはの一点はなはす

れば便つち著つくに似つん。」

頌うたに曰いく、

狗子くす仏性ぶつじやう、全ぜん提正ていじやう令れい。

纒わざかに有無うむに涉わたれば、喪身そうしん失命しつみやうせ

ん。

二 百丈の野狐 ひゃくじやう ちやこ

百丈和尚、凡そ参さんの次で、一老人有

つて常に衆に随つて法を聴く。衆人退

けば老人も亦た退く。忽たちまち一日退かず。

師、遂に問う、「面前まへに立つ者は復また是こ

れ何人ぞ」。老人云く、「諾だく、某甲それがしは非人ひにん

なり。過去かしよひごじ。迦葉か仏ぶつの時に於いて會つ

て此の山に住す。因ちなみに学人問う、「大

修行底ていの人還かえつて因果いんがに落ちるや」。。

それがしこた
某甲对えて云く、「因果に落ちず」。五

百生野狐身じゅうやごしんに墮だす。今請こう、和尚

一転語いつてんごを代わつて責ひつえに野狐を脱せし

めよ」と。遂に問とう、「大修行底ていの人還かえ

つて因果いんがに落ちるや」。師云く、「因果

を昧くわいさず」。老人言下にに大悟、作礼し

て云く、「某甲それがし、已すでに野狐身を脱して山

後に住あ在す。敢あえて和尚に告あぐ。乞こう

らくは、亡僧もうそうの事例よに依よれ」。師、維那いのう

をして白槌びやくしして衆しゆに告げしむ、「食後じきご

に亡僧むじゆを送らん」と。大衆たいしゆ言議ごんぎすらく、

「一衆いちしゆ皆みなな安し、涅槃堂ねはんどうに又た人の病

む無し。「何が故ゆゑぞ是こゝの如ごとくなる」と。

食後に只だ師しの衆しゆを領りやうして山後の

岳下がんかに至いたつて、杖じやうを以もつて一死野狐いつしやこを

挑出ちやうしゆつし、乃すなわち火葬くわさうに依よらしむるを見

る。師し、晩ばんに至いたつて上堂じやうだう、前ぜんの因縁いんげんを拳こ

す。黄蘗わうびやく便べんち問もんう、「古人こじん、錯あやまつて

一転語を祇対し、五百生野狐身に墮す。

転々錯らざれば合に箇の甚麼にか作る

べき」。師云く、「近前来、伊が与めに道

わん」。黄蘗遂に近前、師に一掌を与

う。師、手を拍って笑って云く、「將に

謂えり、赤鬚胡有り」。

無門曰く、「不落因果、甚と為てか野

狐に墮す。不昧因果、甚と為てか野狐

を脱す。若し者裏に向かつて一隻眼を

じやくとく

著得せば、便すなわちち前百丈の風流五百生

を贏かち得たることを知り得ん」。

頌に曰く、

不落と不昧と、りやくせいいつせい両采一賽。

不昧と不落と、せんさくへばせんさく千錯万錯。

三 俱胝ぐてい、指を堅たてる

俱胝和尚ぐてい およ、凡きつもんそ詰問有れば、唯だ一

指を拳こす。後に童子有ちなり。因がいみに外人問

う、「和尚、何の法要をか説かん」。童

子も亦た指頭を堅たつ。胝、聞いて遂に

刃やこばを以てその指を堅たつ。童子、負痛号いじう

哭いして去る。胝、復また之これを招す。童

子、首いじくを廻めぐらす。胝、却かえつて指を堅起じゆき

す。童子、忽然こつねんとして領悟りょうごす。胝、将まに

順世じゆんせせんとして、衆しゆに謂いつて曰いわく、「吾

れ天竜てんりゆう一指頭いっしやうの禅ぜんを得えて、一生いっしやう受用じゆう

不ふ尽じん」と。言おい訖わつて滅めつを示しす。

無門むもん曰いわく、「俱胝ぐてい